

研究ノート

ソンディ・テストから見る
浄土真宗僧侶の性格傾向の一端
— 浄土真宗の現状を中心に —

菅 原 圭*・上 松 幸 一**

(京都文教大学大学院*・京都文教大学大学院・京都府宇治児童相談所**)

I. 問題・目的

(1) 日本における浄土真宗の現状

近年、宗教離れ、寺離れが進んでいると言われている。その中で、多くの宗派が現状と課題把握のために教団全体の統計的調査を実施している。浄土真宗の真宗大谷派では、1921年から「教勢調査」を実施している。「教勢調査」とは国勢調査をモデルに作成された調査である。「教勢調査」は2012年までの間に7回実施

されており、戦後は約10年に1度の間隔で実施されている。その第7回「教勢調査」報告書(真宗大谷派宗務所企画室, 2014)より、現代日本における浄土真宗の現状を概観したい。

「教勢調査」の経過をTable.1に示す。Table.1の対象寺院数を見ると、第2回から第7回までの約50年間に、対象寺院が534寺院減少しており、寺院の存続が難しくなっていることが窺える。これは、檀家の後継ぎ不定住による寺院基盤の揺らぎからも窺える。揺れが強い、揺れ増

Table.1 「教勢調査」の経過

回	実施期日		対象寺院数	回収(%)
第1回	1921(大正10)年5月1日		約9,500	
	調査報告	『宗報』1921年9月号～1922年1月号		
第2回	1960(昭和35)年11月1日		9,320	9,261(99.4%)
	調査報告	『真宗』1962年3月号～6月号・11月号／1964年2月号		
第3回	1970(昭和45)年11月1日		9,283	9,283(100%)
	調査報告	『真宗』1971年5月号～8月号・10月号		
第4回	1980(昭和55)年11月1日		9,224	9,144(99.1%)
	調査報告	『宗門の現状―第4回教勢調査報告』1981年12月1日		
第5回	1992(平成4)年5月1日		9,024	8,991(99.6%)
	調査報告	『真宗』1993年6月号・7月号・9月号・10月号		
第6回	2000(平成12)年11月1日		8,913	8,845(99.2%)
	調査報告	『真宗』2002年3月号～6月号		
第7回	2012(平成24)年10月1日		8,786	8,710(99.1%)
	調査報告	別冊『真宗』2014年		
別冊『真宗』(2014) p.4				

加と回答したのは52.1%であった。第6回(2000年)では32.3%で、檀家の後継ぎの不定住が増加しており、檀家の世代交代が難しくなっていると言える。また、檀家が寺院をはなれた理由として、遠隔地への転居(35.9%)、後継者の不在(25.7%)、寺院をはなれた檀家はほとんどいない(16.8%)であった。このことから、檀家の世代交代の出来なさは、核家族化や過疎化の流れから、子世代や孫世代が、親世代とは別の場所で生活していることから生じているのではないかと思われる。その上、第6回では寺院をはなれた檀家はほとんどいないと回答したのが37.4%であった。このことから、この10年で檀家が寺院を離れる率が上がっていることが窺える。そして、櫻井(2016)が「宗教施設の運営は人口の変化に脆弱である」と述べているように、社会的な人口減少も大きく影響しているだろう。以上のことなどから、寺院の存続の難しさが生じている。

また、寺院と檀家との関わりにも変化が生じている。まず、檀家が寺院の法要などの行事に参加しなくなっている。真宗大谷派にとって最も重要な法要である「報恩講」についても、参詣人が減ったとの回答が46.9%であった。第5回(1992年)では17.2%、第6回(2000年)では27.6%であり、参詣人の減少率が年々大きくなっている。また、葬儀の執行回数について減ったとの回答が36.9%であった。その理由として檀家の減少(70.4%)、葬儀自体の不執行(12.1%)であった。法事の回数が減ったとの回答が55.6%であった。その理由として年忌法要などの省略または併修(50.4%)、檀家の減少(22.9%)、法事自体の不執行(22.5%)であった。このことから、檀家との関わりが葬儀の1回のみになってきていることがわかる。その上、葬儀会場が、セレモニー会場(80.5%)、自宅(15.1%)、公民館など(12.3%)、寺院(10.0%)

と、ほとんどがセレモニー会場での葬儀となっている。そのため、寺院に来ることもあまりなくなっている。以上のことから、檀家との関係が希薄になってきていると言える。また、寺院自体の必要性の薄さや、僧侶が葬儀の際にしか必要にならなくなったことも窺える。

その一方で、関わりの深い檀家も存在する。檀家の中でも、役員と呼ばれる人々とは、会議を重ねながら共に寺院の運営方針を決定する。その役員の決め方は、住職が選んで互選(25.4%)、檀家の話し合いまたは選挙(23.3%)、世話方などで互選(20.0%)、話し合いの中であるが住職の意見が決定的(12.8%)、一部世襲、一部住職の依頼(12.3%)、世襲(3.9%)となっている。住職中心のものと、檀家中心のものがあるが、どちらかと言えば檀家中心に決定している傾向がある。このことから、運営において、檀家の意向を汲み取る必要があると言える。

以上、日本における浄土真宗僧侶の置かれている現状を述べた。この現状の中で、大半の浄土真宗僧侶は僧職を世襲制で代々受け継いでいる。次に、寺の子はどのようにして僧侶になるのか、僧侶になるまでの流れを大まかに概観したい。

(2) 寺の子が僧侶になるまで

まず僧侶になるためには、得度を受けなければならない。得度とは、在家より僧侶となる儀式のことで、いわゆる“出家”を意味する。真宗大谷派では9歳、浄土真宗本願寺派では15歳になると得度を受けることができる。その後、自身の宗派の関連大学に進学し、仏教や浄土真宗について学び、知識を深める。そして教師修練を受け、教師資格を得る。教師とは“人に教える師たるもの”の意味で、僧侶になるための資格のことである。その後、住職修習を受けて初めて住職として認められることになる。

浄土真宗僧侶が行っている仕事内容としては、月参りや法事などの儀礼や、寺院の管理・運営、親鸞の教えを人々に伝えることや相談に乗ることなどが挙げられる。浄土真宗辞典(2013)には、「寺院の住職は、寺務を主宰し、教義の宣布、法要儀式の執行及び檀家の教化育成に努め、所属する僧侶及び寺族の教導に努めなければならない」とされている。そこは当然のことながら“宗教的な色彩”を強く帯びていると言える。

(3) 今日の寺院における宗教的な色彩の薄れについて

しかし、我が国における寺院の“宗教的な色彩”は年々薄れつつあると言われている。久住(1983)は「社会の推移と、それにともなう人間の意識の変化は、寺檀関係の変化をもたらし、寺院護持・教化方策の転換を余儀なくさせ、現代に生きた寺院活動への対応を迫られている現状である」と30年以上も前から警告している。2012年の「教勢調査」を元に分析した寺林(2014)は、教化組織の活動内容や伝道活動の実施では上昇傾向を示すものもあるが、「分析結果全体から見れば、教勢は衰退、弱体化の傾向にある」と述べている。このことから、僧侶が求められるものに“宗教的な色彩”があまり含まれていないと言える。この傾向には、先に述べたような核家族化や過疎化という社会の流れに加え、科学の進歩により、目に見えないものが信じられにくい風潮も関係しているだろう。また、現代社会が忙しくなっていることも関係している。矢野(1995)は時間の希少性が増大し、人々が時間に追われる社会が、現代では「豊かな社会」と考えられていると述べている。それに対し、太田(1981)は、仏教の歴史を、こころの探求の歴史と述べており、超越者による救済を拒否した仏陀にとって、自己への

沈潜による方法のみが残された唯一の道であった。あとにつづく学僧たちもこころへの考察を深めていったと述べている。このことから、現代社会では、こころの探求や考察をじっくり行う時間を確保しない傾向があると言える。この「豊かな社会」の捉え方のギャップも“宗教的な色彩”を薄めている要因である。そのことは結果的に僧侶自身が“宗教的な色彩”や教義を突き詰めて考えることを難しくさせていると言えよう。僧侶が教義を突き詰めて考え、世に広めることよりも、教義をいかに現代にマッチさせるかということを考え、提供するということが重要となってきている。近年では、イベントを行う寺院も増加している。浄土真宗本願寺派の取り組みとして、定期的な寺院の清掃活動などを実施している寺院もある。寺院に触れる機会を増やし、関わってもらうことで、寺院を身近なもの、自身の大事な場所として感じてもらうという目的がある。その結果、作業をきっかけに檀家の世代交代、聴聞者の増加という効果をもたらしている。このように、いかに寺院との繋がりを構築してもらうかが課題となっていることが窺えるが、そのことは“宗教的な色彩”という観点から見ると、その本質部分がそぎ落とされているのではないと思われる。

また、このような“宗教的な色彩”の薄れや檀家離れから、兼業をせざるを得ない寺院も存在する。浄土真宗は僧俗の区別がない在家仏教であるため、“俗である”という認識はあるが、布施と給料では意味合いが違ふと考えられる。その中でも、幼稚園の経営や、教職という選択が多い。特に教職は、自身が運営していない場所で働くという点で、兼業という意味合いが強くなる。しかしながら、なぜ教職という兼業の選択がなされるのであろうか。そこには僧侶という生業から影響を受け、構築される“ものの考え方”や“性格”などがあるかもしれない。

(4) 宗教的な色彩や僧職を受け継ぐことで傾きやすい性格傾向を理解するために

以上のような僧侶の持つ“ものの考え方”や“性格”などを把握するため、会話や面接を通してそれを把握ことは重要である。しかしながら、そのような投げかけは、僧侶の生き方を直接的に問うものであり、必ずしも全てオープンに語ることができるものではない可能性がある。

言葉では語れない“考え方”や“性格”を把握する際、心理学の世界ではアセスメントの方法として心理検査を用いることがある。特に投影法については曖昧な刺激に対する反応からその人の状態像や性格などを把握できる。そのため、回答を個人の意思で歪曲することが難しく、本音の部分を把握するためには有効な手段となる。

特に、僧侶個人の“宗教的な色彩”、および“僧職を受け継ぐことで傾きやすい性格傾向”を把握しようとする際、“ソンディ・テスト”は非常に有用と思われる。ソンディ・テストは L. Szondi (1893-1986) によって構築された運命分析学を検証するために作られた衝動特性把握のための検査である。Szondi は運命分析学において、その理論を構成する重要な概念として、家族的無意識、強制運命、自由運命を導き出した。家族的無意識とは、人間の衝動は先祖の要求する衝動方向性が、子孫にも受け継がれる遺伝力のようなものとした（大塚, 1994）臨床仮説である。Szondi は衝動を、8つの衝動欲求（衝動因子）と、それに対応するそれぞれの一対からなる衝動傾向（衝動領域）からなるものと考えた。8つの衝動欲求は母性的欲求（h）、父性的欲求（s）、倫理的欲求（e）、道徳的欲求（hy）、所有への欲求（k）、存在への欲求（p）、探索と執着への欲求（d）、依存と離別の欲求（m）となっている（奥野, 2004）。その8つは2つで一対と

なっており、①個人的な性衝動や人が現実で生きていく態度・姿勢、愛情生活などの特徴を主とする性衝動領域（S:h と s）、②個人の情緒的・感情的側面の現れ方を主とする感情衝動領域（P:e と hy）、③人間的な理想追求の形と現実吟味力に関する特徴を主とする自我衝動領域（Sch:k と p）、④個人とそれを取り巻く環境との関係性・考え方を主とする接触衝動領域（C:d と m）に分けられる（松原, 2011）。それを Table.2 に示す。

そして先祖の要求する衝動は、その方向性が個人の選択によって決定されると考えるが、個人の意思において方向性が変更可能なものを自由運命、個人の意思では変更不可能なものを強制運命と名付けた。また、その遺伝力が他者との関係の中で機能する場合、他者にも同様な遺伝力がある故に、ある遺伝力同士が引き合い、繋がろうとするという仮説のもと、特に恋愛対象者、友人、職業、疾病、および死の様式の選択において認められやすいと考えた。

ソンディ・テストの施行法は8枚6組、合計48枚の人物顔写真を提示し、それを好き嫌いに選択させることにより人間の衝動特性を把握する。8つのファクターの方向性は「+」、「-」、「±」、「0（φ:強制0反応）」の記号で示される。また、その衝動方向性の強度が高い場合は過圧「!」が1～3つの範囲内で付くことがある。

そのほかにも、人間の衝動には表層に出現しやすいものがあり、それは前景像（以降 VGP）で示される。一方、背景像（以降 EKP）には現段階では表に表出されていないが、個人に内包され、表層に出現する準備段階の衝動が示される。実験的補償像（以降 ThKP）は、理論的に考えられる人間の深層に隠れた衝動（必ず VGP の結果と正反対となる性質を持つ）を意味するものであり、これらの3つの衝動レベルを合わせて検討する事で、その力動性を評価で

Table.2 ソンディ・テストにおける各ファクターの意味

S 性衝動領域	h	母性的欲求	h+	特定他者への情愛欲求(あたたかさ、親切さ、主観的など)
			h-	社会全体への博愛欲求(知的、冷静、博愛、冷淡など)
	s	父性的欲求	s+	攻撃的、活動的情愛欲求(攻撃性、活動的、積極的、支配的など)
			s-	受動的、消極的情愛欲求(受動的、消極的、献身的、自己犠牲など)
P 感情衝動領域	e	倫理的欲求	e+	善・良心への欲求(親切、純真、寛容、良心など)
			e-	悪・怒りへの欲求・猜疑(悪意、憤怒、猜疑心、嫉妬、粗野など)
	hy	道徳的欲求	hy+	自己顕示への欲求(露出的、自己顕示、名誉欲、人気取りなど)
			hy-	自己隠蔽への欲求(羞恥、虚言、逃避、臆病など)
Sch 自我衝動領域	k	所有への欲求	k+	取り込み価値づける欲求(内向的、自閉的、利己的、自己中心的、論理的など)
			k-	取り込み無価値化する欲求(抑制的、現実適応的、合理的、防衛的、否定的など)
	p	存在への欲求	p+	自我拡大欲求(外向的、自我肥大、権威的、高慢、競争心など)
			p-	関与・投影の欲求(被害感、過敏、不信任感、自尊心の欠如など)
C 接触衝動領域	d	探索と執着への欲求	d+	変化を志向する欲求(探究心、節操のない、意思不定など)
			d-	保守・固執する欲求(儉約、収集傾向、粘着質など)
	m	依存と離別の欲求	m+	依存対象へ執着する欲求(依存的、情豊か、不安からくるしがみつきなど)
			m-	依存対象からの離反欲求(孤立、離反、非現実的、焦燥、不安定など)

奥野(2004)を参考に作成

きるという利点もある。

そこで本研究では、浄土真宗の男性僧侶にソンディ・テストを実施し、僧侶の宗教的な色彩や、僧職を受け継ぐことで傾きやすい性格傾向があるのかを検討することを目的とする。

II. 方法

(1) 調査協力者

調査協力者は浄土真宗の男性僧侶 11 名であった。協力者の一覧を以下の Table.3 で示す。

協力者に対して、個別に 1 回法のソンディ・テストを実施した。調査期間は 2016 年 9 月～10 月であった。倫理的配慮として、調査対象者には①本研究の意義、②個人情報取り扱いへの配慮の 2 点を説明した。また、研究結果を公表する可能性があることを説明し、同意を得

た。

(2) 分析方法

ソンディ・テストの結果については、VGP および EKP を検討の対象とした。ThKP は必ず VGP の結果と正反対となることが分かっているため、前景像を検討することで事足りると考えられるため、検討対象からは除外した。ソンディ・テスト反応に関しては、11 名の結果を概観し、3 年以上のソンディ・テスト実施経験を持つ臨床心理士有資格者 3 名の合議制により、特徴的なものを抽出することとした。

III. 結果

Figure.1 は対象者 11 名における各ファクターで、VGP および EKP を含め、過圧反応、

Table.3 調査協力者一覧

協力者	年齢	性別	出生 順位	役職	勤務体制				宗派	
					専業	兼業	教務所	院生	大谷派	本願寺派
A	22歳	男	長男	衆徒				○	○	
B	24歳	男	長男	衆徒				○		○
C	27歳	男	長男	衆徒		○			○	
D	29歳	男	長男	衆徒			○		○	
E	30歳	男	長男	副住職	○				○	
F	32歳	男	長男	衆徒			○		○	
G	32歳	男	次男	衆徒			○		○	
H	40歳	男	長男	住職	○				○	
I	43歳	男	次男	住職	○				○	
J	49歳	男	長男	住職		○			○	
K	49歳	男	長男	住職	○				○	

±反応を示した者の数を示したものである。

特に p ファクターにおける VGP もしくは EKP において、過圧「!」がつく、「±」のように葛藤があるなど、衝動の高まりが示されているものが 11 人中 8 名 (73%) となった。その内訳として、VGP もしくは EKP において p + に過圧がつくのは 5 名 (45%) であり、p - に過圧がつく者は 1 名 (9%)、p ± の者は 2 名 (18%) となった。e ファクターについては、過圧がついて方向が偏っている、あるいは±反応を出して葛藤状態にあるといった偏った衝動示す者 (11 名中 3 名で 27%) は比較的少なかった。また m ファクターにおける VGP もしくは EKP において、過圧がつく、または「±」のように衝動の高まりが示されているものは 12 人中 8 人 (67%) となった。その内訳は m + に過圧がつく者が 4 名 (33%)、±が 4 名 (33%) となっている (Figure.1)。

また Figure.2 は VGP におけるファクターごとの反応記号別人数、Figure.3 は EKP にお

けるファクターごとの反応記号別人数である。hy ファクターの VGP について、0 および - (過圧がつく者を含む) の反応者は 11 名中 10 名 (91%)、また s ファクターの VGP においても、0 および - (過圧がつく者を含む) の反応者は 11 名中 10 名 (91%) であった。h ファクターの EKP において、0 および φ (強制 0 反応) を示すものは半数の 6 名となった。

この結果から、僧侶の特徴が表れていたファクターについて、以下に説明する。

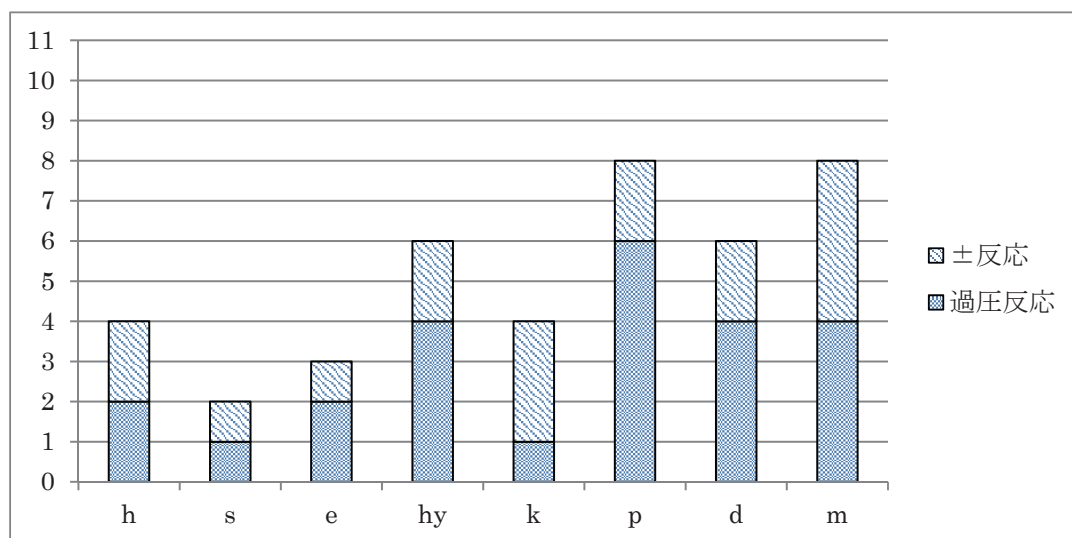


Figure.1 VGP、EKPを含めた各ファクターにおいて過圧反応、±反応を示した人数

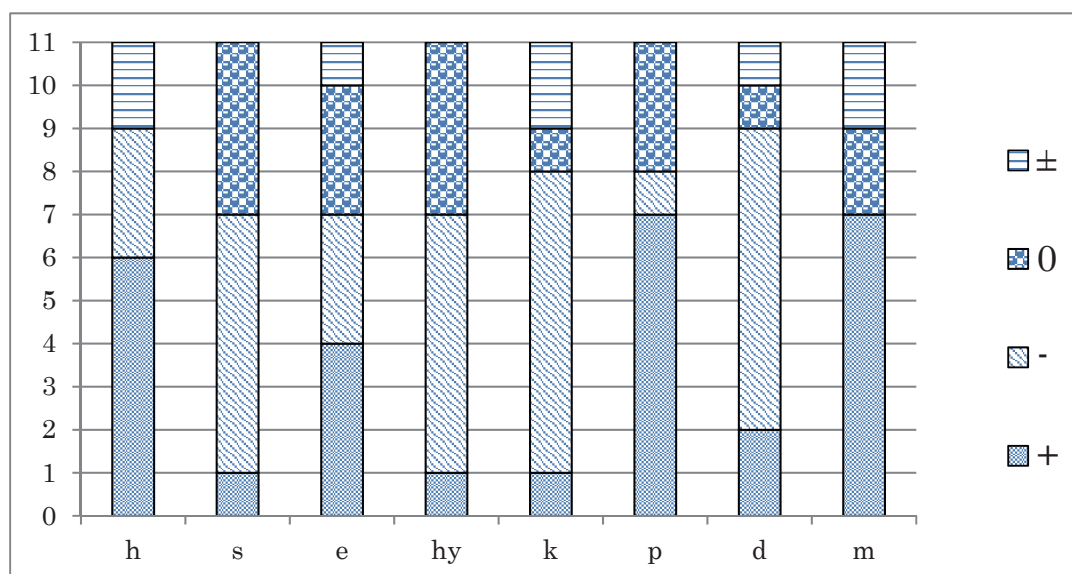


Figure.2 VGPのファクターごとの反応記号別 (+, -, 0, ±) の人数

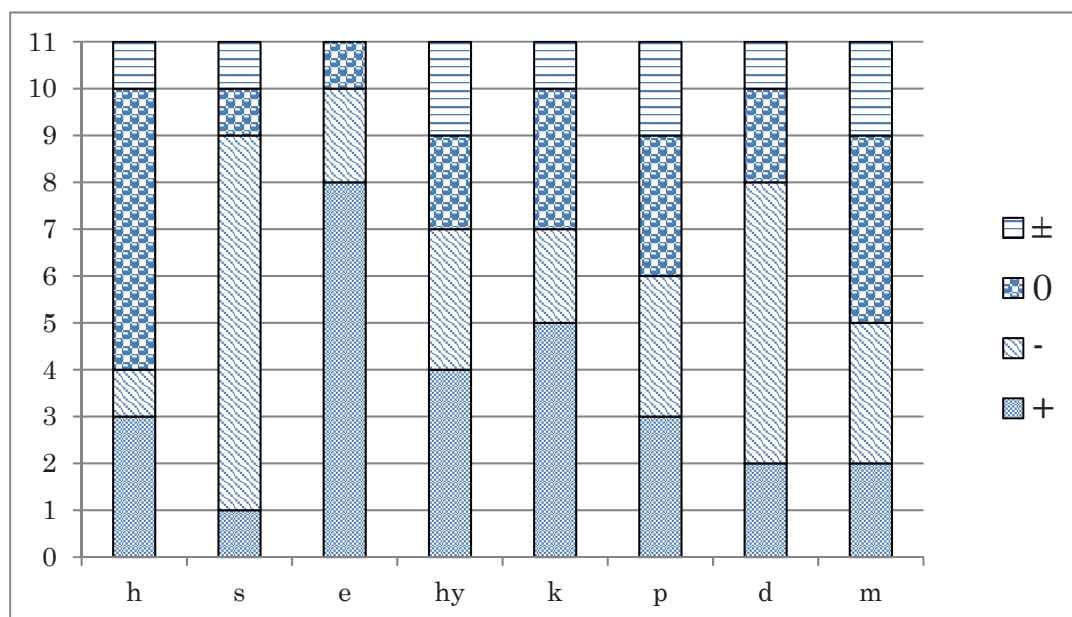


Figure.3 EKPのファクターごとの反応記号別(+,-,0, ±)の人数

IV. 考察

(1) e ファクターについて

e ファクターに関しては、善・良心への欲求を示すファクターであるため、道徳的一面を示し、宗教的な色彩との親和性が高いファクターと言える。しかし、e ファクターで表出される反応として特定の方向性は確認できなかった。このことから、僧侶という職業であったとしても、日々の生活の中で宗教的な色彩を抱え続けることの難しさがあると考えられる。

これは、先にも述べたように、社会の変化の中で、求められるものが変化しており、僧侶の在り方も変化している表れではないかと考える。僧侶は、内省を繰り返す中で、宗教的な色彩や自身を高めてきた。しかし、近年の社会の変化は著しく、ここを探索する余裕がなくなっている。そのため、効率的で効果が見えやすいものを好む傾向がある。そのような社会の状況の中で、僧侶たちも立ち止まって考えるこ

とが難しくなっていると思われる。

(2) p ファクターについて

p ファクターは、実存領域の拡大、拡張を主とするファクターである。p + は自我を拡大する衝動方向を示す。p + に過圧がつく場合は自我の精神性を高め、より宗教妄想的になることを意味する。これは神との同一化（万能感情）をはかる衝動とも言える。過圧が強くなるにつれ、自我や自尊心が高まっていくと考えられる。それは時として権威的であったり、傲慢であったりすることもある。そのような人たちは、基本的に自身が人の上に立ち、人に伝達することに心地よさを感じやすい傾向があると言える。人に伝達することに力を注ぐということは、教員に求められる特性である。これは、僧侶が内省をすることが難しくなった結果、知識を教える教員同様、教義を知識として教えることに力を注いでいるということなのではないかと考える。

(3) hy ファクターについて

hy は自己顕示への欲求を示すファクターである。この点では、僧侶は自己顕示欲求を抑圧し、もしくはそのような衝動がなかったかのように振る舞う事が多いのではないかと推測される。

このことから、僧侶が本来の自分を隠し、檀家の求める“僧侶像”を演じているのではないかと考える。しかし、僧侶が“僧侶像”を演じていることに気づいてしまうと、本来の自分とのギャップが大きくなり、葛藤が生じてしまう。その葛藤の認識を防ぐため、僧侶は演じていることに気づかないように、本来の自分を生きていくと自身に言い聞かせているのではないかと思われる。これはエネルギーを大きく消費することである。しかし、僧侶自身が気づいていない以上、自覚するのは難しい。そのため「何かわからないが疲れる」というエネルギーの低下が生じてしまう可能性がある。

(4) h ファクターについて

h ファクターについては VGP においては明確な一定の方向性は示されないが EKP において 0 反応もしくは強制 0 反応を示す者が半数を占める。これは、個別で愛情や関係性を大事にするのか、博愛的に愛情や関係性を大事にするのかは様々であるが、表層面において他者との関係性にエネルギーを使いすぎて、内面では対人エネルギーが欠如し、人との繋がりを放棄するような側面を持っている可能性がある。

このことから、檀家との繋がりがや、やりとりにエネルギーを注ぎすぎてしまっていることが窺える。檀家との関係性は、本来の自分ではなく、僧侶としての自分とのやりとりである。しかし僧侶は、僧侶としての自分と、個人としての自分を分けている認識が薄いため、この内面的対人エネルギーの欠如に気が付きにくいと考

えられる。

(5) m ファクターについて

m ファクターは依存欲求に関するファクターである。m + は既存のものに対するしがみつきの執着であり、一方で m - は既存のものから離反する衝動である。僧侶は既存のものに対して強いしがみつきの感覚を持っていたり、もしくはしがみつきの離反の相反する衝動を同時に抱えて葛藤していたりする者が多いという特徴がこのファクターに表れている。

これは、代々続く寺院へのしがみつきの、その歴史から脱したいという相反する思いの間で、葛藤状態にあることを表しているのではないかと考える。歴史ある寺院は自分の誇りでもあり、守っていききたい思いがある。その一方で、生まれたときから決められた道を歩むことへの抵抗や、自身の望む職業選択を行いたい思いがある。自由を望む思いはあるものの、僧侶を継ぐ方向に押し進める理由として、僧侶は寺院を継がない場合、その寺院から一家で出て行かなければならないということが挙げられる。そのため、“実家”を守るために継いでいることも多いと考えられる。その上、家族や檀家から継ぐことを期待され続けてきたことから、その期待に応えようとする部分も大きいだろう。そのような複雑に絡み合った思いから、継ぐことを決意しているため、葛藤を抱えているのではないかと推察される。

以上が、僧侶の特色が表れていた各ファクターの考察である。最後に、以上を踏まえた総合的な考察をしていきたい。

V. 総合考察

浄土真宗僧侶は、様々な葛藤を抱えながら生きているという性格傾向を持つことが窺える。

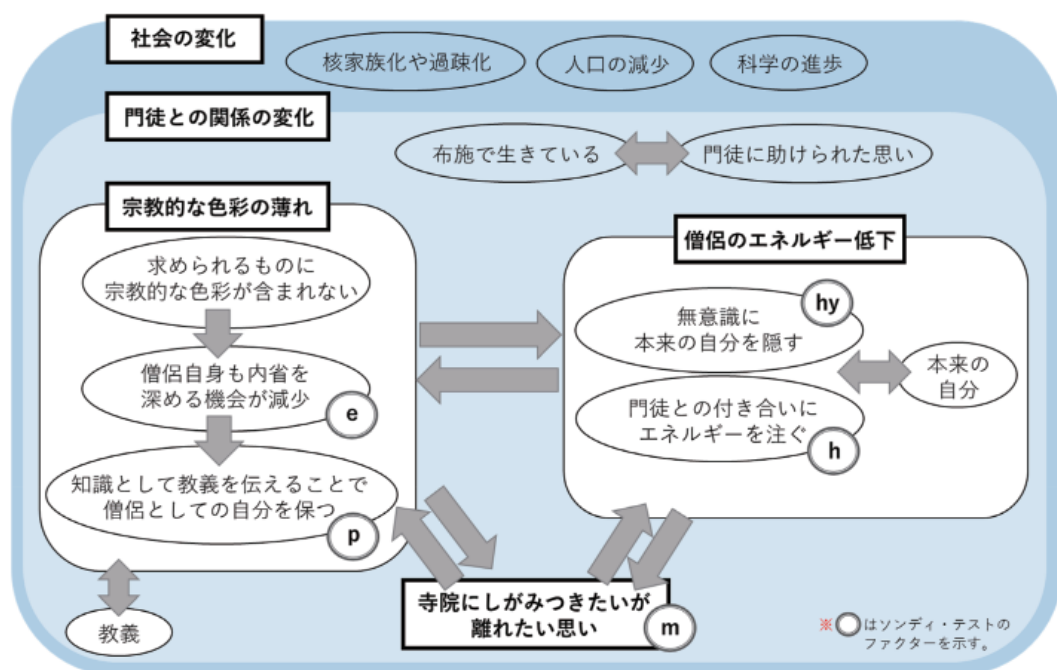


Figure.4 浄土真宗僧侶の性格特性とそれを取り巻く環境

それをまとめたものを Figure.4 に示す。

核家族化や過疎化により、檀家の減少、世代交代の難しさが生じるようになった。また、人口減少によっても、檀家数の減少が生じている。その上、科学の発展により、科学的に証明されていないものは信じにくい世の中になった。このような社会的な流れから、檀家と寺院や僧侶との関係にも変化が生じてきた。元々、檀家との関係は葛藤が生じやすいものである。僧侶は布施で生きているため、檀家からネガティブな評価が高まった場合、生活が出来なくなってしまう。そのため、布施が少ない場合、檀家に対してネガティブな感情を抱えやすいと推察される。その一方で、檀家に寺院の運営において手伝ってもらったという思いや、僧侶自身が助けられた思い、守られた思いなどがあり、大事にしたい気持ちもある。このように、良い側面も悪い側面も同時に併せ持つ性質がある。それに加え、社会の変化により、寺院や僧侶の必要性

が薄れてきている。そのため、檀家に大事にされていない思いも抱えるようになる。しかし、生活のためや、檀家を大事にしたい思いから、檀家の求めるものに合わせた対応や、求められる“僧侶像”を提供するようになる。しかし、檀家から求められるものの中には、宗教的な色彩が含まれなくなってきている。僧侶は、その要求に合わせて知識として教義を伝えることで対応している。これは僧侶自身をも宗教的な色彩から遠ざけてしまう。檀家に合わせた対応や、求められる“僧侶像”を提供することは、僧侶が生活していく上で必要なことではあるが、教義とは離れていくこととなり、結果的に教義とのギャップが大きくなる。そのことから、更なる葛藤が生じる。しかし、これは同時に、檀家から大事にされていないと感じている僧侶が、自分を保つための守りとしても機能している。そのため、一概に失くして良いものでもない。また、檀家の求める“僧侶像”を提供すること

で、本来の自分とのギャップが大きくなり、ここにも葛藤が生じる。しかし、これ以上葛藤を意識してしまうと、僧侶自身が潰れてしまう可能性がある。そのため、“僧侶像”を提供しているということは、無意識下に追いやっている。また、檀家との関係が生活まで及んでいることから、本来の自分が檀家とやりとりをしているという意識にすり替わりやすい面もある。そのため、僧侶は自分自身の対人エネルギーの低下に気が付きにくい。

そして、僧侶は寺院にしがみつきたいが、離れたい思いという根本的な葛藤を抱えている。これは、寺院に生まれ、継がなければならないという運命から逃れたい思いと、寺院に対する誇りや歴史を大事にしたい思いの間で生じる葛藤の表れだと推察される。この葛藤には、家族や檀家、その歴史など、多くの人間や、長い時間が関係している。それに加え、僧侶自身の生まれてきた意味にも直結している問題である。そのため、この葛藤が最も複雑だと言える。しかし、この問題に直面化してしまうと、僧侶自身の生きている意味の問い直しをしなくてはならなくなってしまう。それはエネルギーの低下が生じている僧侶にとっては、難しいことだと考えられる。そのため、直面化を避け、葛藤を抱え続けるという選択をせざるを得ないのではないかと考える。

以上のことから、浄土真宗僧侶の性格傾向は、環境の影響を受けている部分大きいということが明らかになった。その環境は、生まれたときから育ってきた環境であり、僧侶自身は環境の影響について感じにくいのではないかと推察される。そのため、自分自身の本質的な傾向と思っている部分も大きいだろう。しかし、その環境は多くの葛藤をはらんでいる。これは僧侶にとって強いストレスとなっている可能性が高い。その一方で、その葛藤自体が僧侶の守りと

もなっているため、僧侶は直面化しないよう対応しているのではないかと考えられる。これは、ストレスをストレスと感じないように対応しているということではないだろうか。この対応は、言い換えれば、曖昧さ耐性とも言えるのではないかと考えられる。この曖昧さ耐性は、僧侶が苦しみながら得た適応方法の1つであり、能力の1つでもある。曖昧さ耐性が高いことにより、様々な葛藤を抱えることが可能になり、僧侶として生きていくことが苦ではないと感じるのではないかと推察される。この意味では、“葛藤を抱え続けて生きていく意味”というものもあるのではないかと考える。

しかし、中にはこの葛藤と直面化している僧侶も存在するだろう。その僧侶に寄り添ったサポートや、共に葛藤を抱える存在も必要となってくると考えられる。

VI. 今後の展望と課題

本研究では、浄土真宗僧侶にソンディ・テストを実施し、僧侶の宗教的な色彩や、僧職を受け継ぐことで傾きやすい性格傾向があるのかを検討した。その結果、環境の要因により、様々な葛藤を抱えながら生きているという性格傾向が明らかとなった。

しかし、今回はデータ数が少なかったため、統計処理を行うことが出来なかった。今後、データ数を増やし、再検討する必要がある。また、今回の調査協力者が浄土真宗の男性僧侶に限定されてしまったことから、女性僧侶や、他宗派の僧侶を含めた調査を実施する必要がある。そこから、更に多面的に僧侶の性格傾向を明らかにする必要がある。

その上で、僧侶に必要なサポートの仕方やシステムを検討していく必要があると考える。

VII. 文献

- 太田久紀（1981）仏教の深層心理 迷いより悟りへ・唯識への招待、有斐閣。
- 大塚義孝（1994）衝動病理学 ―ソンディ・テスト、誠信書房。
- 奥野哲也監・内田裕之・石橋正浩・串崎真志（2004）ソンディ・テスト入門、ナカニシヤ出版。
- 久住 謙是（1983）宗門の現状と課題 ―五十五年度宗勢調査報告から一、棲神：研究紀要、55, 145-146。
- 櫻井義秀・川又俊則編（2016）人口減少社会と寺院 ―ソーシャル・キャピタルの視座から、法藏館。
- 浄土真宗本願寺派公式ホームページ <http://www.hongwanji.or.jp>（2019 年 11 月 22 日 取得）。
- 浄土真宗本願寺派総合研究所編（2013）浄土真宗辞典、本願寺出版社。
- 真宗大谷派宗務所企画室編（2014）別冊『真宗』 第 7 回「教勢調査」報告書、真宗大谷派宗務所。
- 寺林脩（2014）「教勢調査」から見る宗門の現状、別冊『真宗』 第 7 回「教勢調査」報告書、117-134、真宗大谷派宗務所。
- 松原由枝（2011）ソンディ・テストマニュアル、千葉テストセンター。
- 矢野 真和編（1995）生活時間の社会学―社会の時間・個人の時間、東京大学出版会。

Abstract

Partial Personality Trends in Jodo Shinshu (True Pure Land) Buddhist Monks Observed with the Szondi Test

Kei SUGAHARA* · Koichi UEMATSU**

(Graduate School of Kyoto Bunkyo University* · Graduate School of Kyoto Bunkyo
University & Kyoto Prefectural Uji Child Consultation Center**)

In recent years, separation from both religion and Buddhist temples has been growing. The 7th “Religious Influence Survey” Report (True Pure Land Buddhism Otani Movement Office Planning Department, 2014) gives a numerically-informed portrayal of the difficulty of maintaining Buddhist temples and of changes in the involvement of temple supporters. In the background of this phenomenon lie societal changes, including the trend toward the nuclear family, depopulation, decreasing population, and the advancement of science. Further, among public demands of Jodo Shinshu Buddhist monks, the “religious tint” is disappearing. Against this current reality, Jodo Shinshu Buddhist monks are continuing to take up the mantle of the priesthood. In this study, we administered the Szondi test to 11 male Jodo Shinshu Buddhist monks to investigate whether certain personality traits were more likely among those continuing to the priesthood. Our results showed that Jodo Shinshu Buddhist monks tend to be living with various conflicts. The influence of the environment was a major factor in this. It is highly possible that, since their environment is filled with a multitude of conflicts, it is causing these monks severe stress. At the same time, because these conflicts also constitute a defense for them, it is presumed that they may be dealing with conflicts that have not come to the fore.

